



～有田小学校校長 江越礼太を描いた画家～

ほ う か べ
波々伯部 繁(捨四郎)
(ははかべとも)

(文久2年・1862～昭和5年・1930)

有田小学校が白川小学校として設立されて145年となります。一説によればその一年前というものもありますが、いずれにせよ県内でも早い時期に学校が設置されました。

これまでも館報No.40、No.47などで何度かその校長であった江越礼太先生の功績を紹介してきました。江越先生は退職後、長崎滞在中に病にかかり、明治25年（1892）1月31日午前6時に逝去されました。今から125年前のことです。

現在、有田小学校校長室には江越先生の肖像画が掲げられています。明治31年1月22日付けの佐賀新聞の記事に「故江越翁油絵肖像製額の計画」という見出しで、「白川小学校（現在の有田小学校）訓導古賀令次郎氏外故江越如心翁の薫陶を受け現在同校に奉職せる教員の人々は翁の功績を未来永遠に表彰」するために肖像画を扁額にして校内に掲げる計画をたて、一人20銭以上50銭以内の募金を呼びかけました。

その後の経緯は新聞記事で見ることが出来ませんが、額縁を含めた高さ131cm、幅103cmの肖像画は前述のように有田小学校校長室に現存しています。絵の右下には、「明治三十一年五月 波々伯部繁写@」という描いた画家のサインと製作年月があります。ただ、珍しい苗字でもあり、絵の達人が多い有田の人でもなさそうだし、この人物は一体誰なのだろうと探していたら、ある方から情報をいただきました。

それは福井市立郷土歴史博物館で平成28年11月から29年1月まで開催された「日本美術を解剖！うつす・写す・映す」という企画展で紹介された中で、明



江越礼太肖像画
(有田小学校所蔵)
肖像画の右下に書かれたサイン



治23年に中根雪江像、同25年に松平春嶽像を描いた画家として波々伯部捨四郎（繁）の名が紹介されているということでした。早速、同館学芸員の藤原千穂さんにお尋ねをしたところ、波々伯部捨四郎（繁）は福井藩出身であることがわかりました。彼はその後、東京でも活躍し、明治から大正にかけて東京銀座にあった三間印刷の画工として、三越呉服店の美人画ポスターを多数手がけたりしていますが、その生涯は未だ不明なことが多いとのことでした。

当時の小学校の先生方が集めた募金を元にどのような形で依頼したのか、また有田と波々伯部とのつながりもよくわかりません。恐らく江越先生の写真をもとに描いたと思われますが、彼には佐賀藩出身の大隈重信を描いた石版画もあり、その辺りの線で迎れるのかもしれない。

さらに明治31年6月にはこれまた門下生が発起して陶山神社境内に「江越如心之碑」という頌徳碑を建立しました。題字は小城藩の旧藩主鍋島直虎、撰文は久米邦武で書は旧小城藩士で親類でもあった中林梧竹が揮毫しました。その後、碑の前では長年江越祭が行われていましたが、有田町役場日誌を見る限り、昭和19年4月15日を最後に途絶えてしまったようです。

(尾崎 葉子)

皿 季刊 山

No.114

夏
2017

有田町歴史民俗資料館・館報

有田内山伝統的建造物群保存地区は、国から「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。地区内で実施している修理事業などについてご紹介します。

●伝統的建造物等の修理事業について

有田内山伝建地区は、岩谷川内の下の番所跡（眼鏡橋付近）から泉山の口屋番所までの約2 kmの間で、15.9haの範囲となっています。地区内には、重要文化財（建造物）や歴史的な資産として指定を受けた159棟の伝統的建造物（以下、伝建物）と地区の景観に彩りを添えるトンバイ塀など130件の環境物件が混在し、有田内山らしい歴史的な景観が形成されています。

地区内では、指定を受けた伝建物の修理事業が毎年計画的に進められ、将来に向けて保存・活用していくことを目指し取り組んでいます。これら修理事業は、建物の所有者と設計者、施工者、行政担当者が事前に

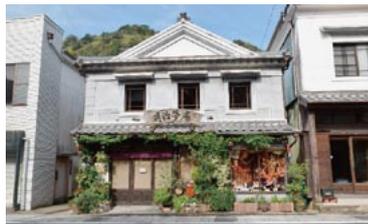
十分な話し合いをしながら、工事の計画を立てます。具体的には、その建物の形式や意匠、工法、材料等を十分に検討して、文化財の建物としての価値を維持・回復するように努め、外観を元の伝統的な姿に戻していきます。また、これらの計画は同時に構造補強や防火性能の向上なども行いますが、文化財の建物でも、現代的で快適な居住空間を確保するため、「建物内部の改装等は比較的自由にできる」ことになっています（重要文化財等は内部も復原の対象になっています）。

修理事業を実施する場合、費用の一部について助成を行っています。主屋の場合、費用の10分の8以内で、最高600万円が助成されますが、付属屋や環境物件では助成限度額が異なります。また、助成を受ける際は、一定の時期に一定の手順で事務手続きなどが必要となります。助成の内容や手順などについてはお問い合わせください。

なお、28年度に実施した保存修理事業は次のとおりとなっています。（森田剛史）

◎大樽・北川邸 外壁改修

東側の外壁の波板トタンがひどく痛んでおり、一部雨漏りをおこしていたので、外壁の上部部分を黒漆喰塗り、腰壁を板壁（杉）の状態に修復しました。



修復前 修復後

◎幸平・鷹巣邸 屋根葺替、外壁改修、建具取替



修復前



修復後

主家東側座敷棟の瓦の割れやズレなどから雨漏りをおこしており、また主家西側外壁は応急補修している状態でした。そのため座敷棟の屋根葺替をおこない、西側外壁はねずみ漆喰塗り、建具を木製建具に修復しました。

◎幸平・桂雲寺 山門 屋根葺替、木組み改修

西側の桁が下がり、西隣の鐘楼の屋根とぶつかりそうな状態でした。木組みを確認するため、瓦を一度下ろし、小屋組み・木組みの方法を確認して修理し、瓦を葺き直しました。



修復前



修復後

●お問い合わせ

規制の内容や地区の範囲、修理事業等に伴う助成内容等については、有田町教育委員会文化財課（電話43 - 2899）まで、お問い合わせください。

幕末・維新に活躍した 有田の先人たち 其二

西松浦郡初の衆議院議員

まつ お かん ざぶ
松尾 寛三 さん

(安政6年・1859～大正11年・1922)



松尾寛三 『西有田町史
下巻』より転載

品評会に先立ち、同27年（1894）9月18日、「佐賀縣五二会」が佐賀県会議事堂で発会式をあげました。この五二会に深く関わっていたのが、大山村出身の松尾寛三さんでした。（文中敬称略）

このほど114回目の有田陶器市も例年以上の来場者を迎えて終了しました。この陶器市の起源が明治29年（1896）3月に開催された「有田五二会陶磁器品評会」であることは、皆様よくご存知のことと思います。この

【生い立ち】

松尾寛三は安政6年（1859）9月13日、父藤九郎・母サメの子として大木宿に生まれました。代々、有田郷の庄屋をつとめていた家でしたが、寛三が生まれたころは佐賀藩が実施した加地子猶予令（別名加地子バツタリ）のため、どん底の状態でした。

このころの逸話に代々庄屋を営む家柄でありながら、斜陽化した貧しい暮らしをしていた中に自家製の麴を担いで行商をしていたとき、「時世とはいえ庄屋の一人息子に生まれながら、幼少の身で行商に身をやつし可憐なり」と担っていた品全部を購入してくれた人があり、後に寛三はこの時の嬉しさ、有難さを何ものにも変え難いと語ったといわれます。

14歳のころに学問を志し、有田白川で漢学塾を営む江越礼太のもとに住み込み、学問を修めました。明治10年（1877）、当時江越塾に共に学んでいた長崎・千々石の橘常葉が残した日記には同年4月23日、教員始め寄宿生一同は四時ごろより、有田を離れる常葉を見送るための宴を催し、さらに場所を移して（清水亭の楼上とあり）、南里豊一、久富頼四郎、藤井三四郎、古邨寛作、土岐徳一、高場権八らと再度宴を催した中に松尾寛三の名があります。時に寛三18歳のころです。生活を共にしながらの学友は、恐らく生涯の友となったのではないのでしょうか。

【財政界での活躍】

明治14年（1881）、22歳のころ伊万里銀行創立と同時に手代として採用されました。さらに2年後、若干24歳で佐賀県議会に立候補して当選し、30歳で伊万里運輸会社（資本金2万円）の社長に就任しました。

また、明治26年（1893）には、深川忠次らとともにアメリカ・シカゴ万国博覧会に渡航。帰国後の翌27年には第4回衆議院選挙に立憲革新党から立候補し当選しました。同年、佐賀県五二会の役員が決定し、本部長に中野致明、監査に松尾寛三が決まりました。ちなみに、香蘭社社長九代深川栄左衛門は本部評議員に就任しています。これが明治29年3月に開催された第1回有田五二会陶磁器品評会（現在の有田国際陶磁展）へと発展し、今日まで続いています。

このほか、伊万里鉄道敷設を計画し、鎮西物産、伊万里運輸、日本勸業銀行設立メンバーに名を連ね、帝国瓦斯^{ガス}電灯会社、小樽漁港株式会社、松尾鉱山鉱業所、愛宕山ホテルなど枚挙にいとまがないほど多くの会社の創立に関わり、社長として経営を行いました。

また、幼いころの苦学の時代を忘れなかった寛三は明治41年（1908）、西松浦郡出身者の東京遊学者のために同郷の森永太郎、藤山雷太、川原茂輔、松尾廣吉らとともに、小石川区原町に丘隅舎という学生寮開設にも尽力しました。

数々の輝かしい功績を残して大正11年（1922）6月14日、64歳で亡くなりましたが、それに先立つこと12年前の明治43年1月、鎌倉・七里ヶ浜沖での逗子開成中学校の海難事故で、長男寛之（寛四とも）を失った晩年の寛三の心中は計り知れない悲しみがあつたことと思われます。現在、町内には松尾家につながる一族の方々が多方面で活躍中です。



明治41年（1908）3月8日の丘隅舎開所式。来賓として大隈重信や鍋島直彬、森永太郎らとともに松尾寛三も列席した

【参考資料】

- ・「西有田町史 下巻」
- ・「かしの実」（実業界の偉人松尾寛三氏伝 浦郷敬之著）
西有田郷土研究会編
- ・「有田町史 陶業編Ⅱ、商業編Ⅱ」
- ・「肥前陶磁史考」
- ・「西松浦郡誌」
- ・東京朝日新聞 明治43年1月25日付けなど



有田異人館の 一般公開が始まりました



有田異人館

有田異人館は平成26年度より28年度まで復原保存修理事業に取り組んできましたが、このほど修理を終え、平成29年4月1日より正式に展示施設として一般公開を開始しました。

有田には、幕末から明治に有力な貿易商人として活躍した田代紋左衛門、さらに販路を拡大するなど海外貿易の隆盛に尽力した息子の田代助作がいました。その助作が有田を訪れた西洋人の接待や宿泊用の施設として明治9年（1876）に建造したものが、有田異人館です。日本の伝統技術で建てられた洋館であるため、ステンドグラスやらせん階段など西洋風な一面が見られる反面、床は畳敷きで壁や天井の全面に和紙が貼られるなど、和と洋の混在した擬洋風の構造になっています。

有田異人館は昭和52年3月11日、佐賀県重要文化財に指定されています。

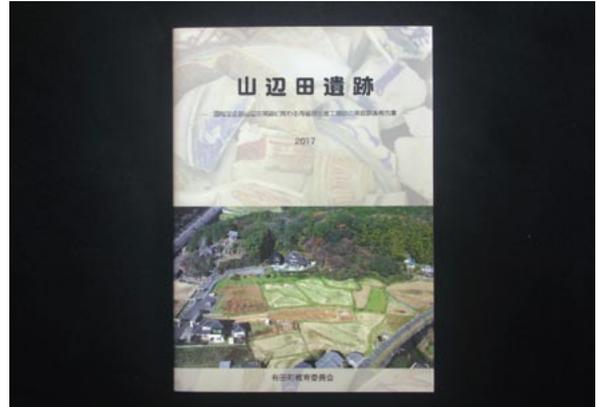
所在地は、佐賀県西松浦郡有田町幸平一丁目2-6です。開館日は、土日祝日、陶器市期間（4/29～5/5）、秋の陶磁器まつり期間で、開館時間は午前10時～午後4時です。入館料は無料となっています。



有田異人館開館セレモニーでのテープカット



山辺田遺跡発掘調査 報告書が刊行されました



山辺田遺跡発掘調査報告書

山辺田遺跡はこれまで数回にわたる発掘調査により歴史的解明に努めてきました。近年では有田焼創業400年事業(佐賀県プラン)の1つである「有田焼の歴史的・学術的価値の再検討」事業として有田焼の初期色絵磁器の創始と展開を検証することを目的とする発掘調査を実施しています。その結果、1,000点を超える色絵磁器片、焼成前の赤絵具が乳鉢に入った状態で発見されたことなど、上絵付け工房特有の遺物の確認ができました。また、赤絵窯跡やオロと推測される製土遺構、陶石の粉碎砂の堆積なども発見されました。こういった状況から証拠となる遺物と遺構が揃ったことにより、山辺田遺跡が上絵付け工程を含む山辺田窯跡に関わる工房跡であることが確実となり、本事業の目的を達成することができました。

内容は、平成4年度の工事、平成10年度の緊急発掘調査、平成25～27年度の3回の学術調査までの調査成果をまとめています。本報告書が今後の有田焼を研究する材料となれば幸いです。構成はA4版、オールカラーの160頁で、販売価格は3,000円です。取扱い場所は有田町歴史民俗資料館東館で行っています。本の部数には限りがありますので、お早めにご購入ください。

季刊『皿山』

通巻 114号（平成29年6月1日）

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>